

開催地名	埼玉県杉戸町
開催日時	令和5年7月15日（土） 10：30 ～ 12：00
開催場所	彩の国いきいきセンターすぎとピア
語り部	柳迫 長三 （広島県広島市）
参加者	杉戸町自主防災組織 90 名
開催経緯	地域によって防災意識に差があり、日頃から防災活動をしている地域や、自主防災組織に所属しているがどのように活動をしていけばいいのかわからないといった声がある点を課題として認識している。そこで、語り部の方を派遣していただき、実際に体験・実施している自主防災活動による話をいただくことで、講演参加者が所属している自主防災組織において今度の活動の実施等、防災意識の向上につなげていく目的から講演会を実施する。
内容	（１）広島で発生した自然災害について 広島は山が多く、山の上や山を切り開いて宅地、山の麓に住宅が密集しているという地域特性がある。地質的にも大量に雨が降ると土砂崩れが起きやすくなっているため、多くの人が度々災害により亡くなっている状況が起きている。定期的な大型豪雨により、土砂災害や豪雨災害で有名になってしまった程である。崖崩れと違って、土砂崩れは周辺住宅を丸々飲み込んで押し流してしまい、救助に向かっても殆どの方が亡くなった状態で見つかってしまう。生きているうちに助けるために、とにかく家に人を残さずに平地に移動させることが重要になる。家を建てる場所、避難所の設置についても情報を精査して安全な場所であるかを見極めることが大事である。 西日本豪雨災害では、豪雨による土砂崩れと川の増水による洪水災害が重なり、大きな被害を受けた。よく家の２階に避難するという話を耳にするが、災害弱者である高齢者は自力で動けない人も多く、２階にあがれず、水没して亡くなってしまった高齢者が多かった。避難所の鍵を自治体職員が管理しており、災害時に鍵を借りに行く手間が生じて避難所の開放に遅れが生じてしまった。避難所には設備や備品も揃っていないので避難生活が辛いものになってしまう。 （２）防災の課題と対応策について いざというときに地域で一体となって連携をするために、地域の自主防災組織をしっかり機能させる必要がある。当番だから仕方なくという意識の低い人や高齢者だけの集まりにせずに、若い人を参加させるために小学校の子供会やPTAでPRをし、防災会の会員の立候補者を募ることや、地域の回覧板で防災ボランティアを募集したりし、やる

気のある若い人を少人数からでも集めることがとても大切である。

小学校高学年での総合学習(40 時間)を受け持ち、地域パトロールや避難所の開設の手伝い等をしてもらい、中学生や高校生で防災士の資格をとってくれる人もいた。

避難所も待遇をよくしておかないと自宅に帰りたがってしまうので、二次災害を防ぐためにもエアコンや畳の用意などもしておくことが必要である。災害弱者(高齢者・障害者)を避難所に移動させるためにタクシー券を配布するなどの対策もしている。

予算については、基本的には行政をあてにはせずに助成金で賄っている。休眠預金の助成を受けるために防災会を法人格にして一般社団法人を立ち上げた。多方面からの助成金により、避難所の道具もその予算で揃えることができた。

大学教授にアドバイスをもらい、避難者の健康管理をスマートウォッチで電子化することや、受付にパソコンやセンサーを置いて防犯対策も進めている。

大型商業施設の市内循環シャトルバスを、台風や地震の際は利用者が減ることに目を付け、有事の際はルートを追加し、避難所への立ち寄りをしてもらうように調整した。それによって住民が楽に避難できるようになった。

地域の福祉避難所も最大限活用できるように、介護施設のスタッフや民生委員や包括支援センターの職員と連携し役割分担を決めている。

災害時は歩いて避難するよりも車を使って避難する人が多いことから、車両避難所の設営も必要である。普段はキャンプ場として利用している広い公園を、いざというときに車両避難所として役立てることにしている。

(3) 地域ぐるみの防災

防災は地域住民が主体となって活動していくことが重要であるため、顔が見える関係性作りを意識することが大切だ。わがまち防災マップやタイムラインの作成のほかに、要支援者避難支援のシートを各世帯に配布し、個人情報にも留意しながら個別計画をたてている。

大人だけで防災活動をするのではなく世代を超えた防災教育を意識づけている。小学生の総合授業や中学生の課外授業などで、意識づけをすることで、子供から家庭へ防災意識を起こすことを狙いとしている。鯉こいキャラバンやキッズ防災士の育成に力を入れ、防災コンクールや防災甲子園などで受賞をすることで、自分の頭で考え主体性を持ち、将来を見据えて地域に貢献できる人を育む活動を行っている。

大人の防災教育をすすめるためにも、イベントをボランティアとして無料で働かせるのではなく、参加したときには日当を出すようにしている。また、防災会議の日程も勝手に決めずにアンケートで回答をしてもらい、都合を合わせるようにして参加率をあげ、

役員が主導になるように気を付けている。また、災害時に地域にメールを発信し、救助の手が必要な人は連絡をもらい人が迎えるようなシステムを構築中である。

(4) まとめ

防災は地域づくりの核となっており、関係性づくりをして組織を作らなければならない。普段の挨拶や日頃の生活で顔見知りになっていること、希薄になっている近所付き合いを補うために、地域のイベント(盆踊り)に抱き合わせて防災会を行うなど工夫が大事である。また、防災情報の配信についてLINEのようなシステムや、災害時に救援者を呼べるシステムを構築中である。被災で一番大事なものは、関連死を防ぐことなので、避難所の設備や備品・鍵の管理、避難者の体調管理・防犯対策までを体制化して避難生活を辛いものにしないようにしていく。



開催地より

災害の体験談や、災害に強い地域を目指すための活動、自主防災組織に関する具体的な事例についてわかりやすく説明をいただいた。今後いつ起こるかわからない災害に対する自主防災組織における体制づくりという点で、参考になる点が多かった。